特集・都市の魅力―第三の生活空間❸

首都圏の盛り場にみる「遊び」機能と街

富田　一也

一――都市の遊び空間の縮図―盛り場
二――繁華街の持つ二つの「顔」
三――利用者によって異なるミセの構成
四――若者の町だが、性格づけはこれから―横浜西口

一――都市の遊び空間の縮図―盛り場

日本において「遊び人」や「遊び女（あそびめ）」と呼ばれる人々は、都市に出現し、都市を舞台に拡大したように、古来より、「遊び」という言葉は、都市と密接に結びついている。

これは、農村地帯が生産の場として重視され、そこに暮らす人々の日常生活までもが、厳しい管理・統制を受けていたのに対して、都市部は人・モノ・金・情報の集積による流通や消費の場としての性格が強いことから、生活行動の自由度が高く、同時に、いわゆるサービス業が成立しやすい環境にあったことによるものと思われる。

横浜市が行った「生活行動調査（平成四年）」から、平日の自宅外での自由時間行動をみてみると、サラリーマン・OLでは「飲酒」「買物」「カラオケ」が上位を占めている。大学生・高校生（ヤング層）では「買物」「友人とのおしゃべり」「カラオケ」の順で、主婦では「買物」「友人とのおしゃべり」「カルチャーセンター」が上位に上がっている。

独身サラリーマンやヤングで「パチンコ」や「ゲームセンター」の人気が高いことを合わせて考えると、「買う」の意味は多少変わってはいるものの、やはり都市生活者にとっての「遊び」は、かつての都市生活者の遊びと同じように「飲む」「打つ」「買う」が中心のようである。しかし、そうした行動がより日常的に行われている点や、行動の場に関して選択の幅が大きく広がっている点に、現代の「遊び」の特色があるといえよう。

現代の都市生活者にとっての「楽しみ」や「遊び」は、いうまでもなく多様であり、そうした多様性に対応できる空間や機会を多数用意しているのが、都市の機能であり、魅力だともいえるだろう。中でも多様な「遊び」への欲求を凝縮し、都市の中でもさらに人々を吸引する街空間が繁華街あるいは盛り場である。

神奈川県が平成二年にまとめた「昭和六十三年・平成元年繁華街の商業活動」では、繁華街を「おおむね八十店舗以上の小売店を中心に飲

図―1　首都圏の繁華街の時間帯別営業状況　（%）

時間帯	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
赤　坂	80～			50～			40～	20～		10～		☆				20～
渋　谷	80～			50～	40～	20～				☆			10～		20～	40～
上　野	80～	50～	☆											☆	50～	80～
銀　座	50～	10～	☆										☆		10～	40～

（表の見方）　この表は、各地点の時間帯別の店舗の開店率を表すもの。例えば、赤坂の開店午後10時（22時）までは80%台（8割以上）の店が営業しており、10時を過ぎると3割が店を閉め、営業している店は50%台になることを表している。☆印は、10%未満だが営業していることを示している。

食店及びサービス業（娯楽業等）を営む事業所が、混在連続して街区を形成している小売機能中心の集積地域」と定義づけ、神奈川県内で百七十七地域、横浜市内で八十一地域を繁華街と位置づけている。

ここにあげられた繁華街には、住宅地近くの小規模な商店街から、元町や伊勢佐木町のような大規模な商店街まで様々だが、

①ショッピング（小売）機能
②飲食機能
③娯楽機能

の三つを街の機能として持っている点では共通である。いずれも、生活者の消費行動を支える都市の機能であり、消費と遊びが強く結びついていることが、ここからも読み取れる。

二――繁華街の持つ二つの「顔」

ところで、繁華街とよばれる街のいくつかを実際に歩いてみると、先にあげた三つの機能に関して、共通する構造があることが分かる。それはショッピング（小売）機能と飲食・娯楽機能の地域内での棲み分けである。

例えば、立地では、ショッピング機能を担う店舗はいわゆる表通りやメインストリートに沿って集積していることが多い。

それに対して、飲食機能や娯楽機能は、メインストリートから一本入った通りや、自動車の通行が少ない裏通りや路地に集積することが多い。

営業時間でも、ショッピング機能を中心とするブロックでは、日中（昼間）が中心であり、午後七時を過ぎると軒並み閉店し、人通りは急激に減少する。一方、飲食・娯楽を中心とするブロックでは、日中から深夜にかけて逆に賑わいを増していく。

図1は、平成元年に第一生命I&Cセンター（現在はビジネス情報センター）が実施した首都圏の繁華街の観察調査の結果の一部である。赤坂（みすじ通り）や渋谷（センター街）といった、飲食、娯楽機能を中心とする地点を観察した結果に比べ、銀座（銀座通り）や上野（アメ横）といった小売機能を中心とする地点では、営業している店（賑わい）に大きな開きがあることがわかる。

繁華街とは、このようにショッピング機能を中心とする「昼」の顔と、飲食・娯楽機能を中心とする「夜」の顔という二面性を持っている。

この両面で、他の地域とは異なる機能・性格を持つ空間として都市を訪れる人々に「利便性」や「楽しみ」を提供しているわけだが、中でも都市生活者の「遊び」を支える空間・機能は、この「夜」の顔が中心となっている。それゆえ、飲食・娯楽機能が強い繁華街は、他と区別する意味で、「盛り場」と呼ばれることが多い。

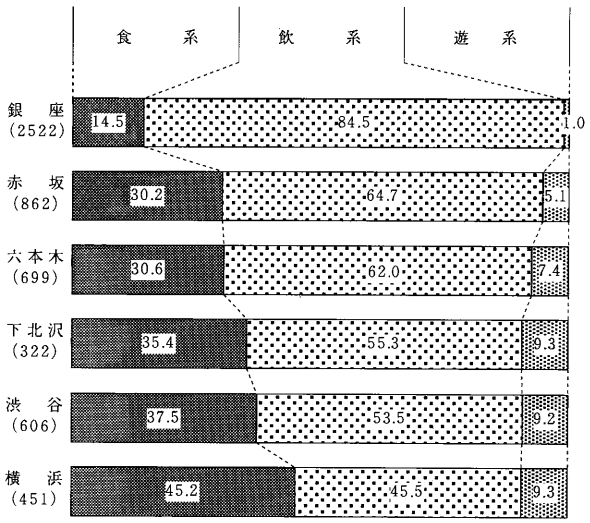
三――利用者によって異なるミセの構成

図2は、首都圏の代表的な盛り場のうち、夜に賑わう地域――いわゆる盛り場のミセの構成を示すグラフである。これは各盛り場から、飲食機能と娯楽機能を担う店舗や事業所（ミセ）を抽出し、そのミセの性格をさらに「飲系」（バーやクラブ、喫茶店など）と「食系」（レストラン、食堂など）、「遊系」（パチンコ、麻雀店などの遊戯空間）の三つに分類してグラフ化したものだ。

それぞれの盛り場を比較すると、中高年層や社用族が多く利用する街とされている「銀座」は、バーやクラブに代表される「飲系」のミセが八割以上を占めている。二十～三十代のサラリーマンやOLが多く利用する「赤坂」「六本木」になると「食系」「遊系」のミセの占める割合が「銀座」に比べて高くなっている。これが、ティーンズや学生などのヤングの街「渋谷」「下北沢」では、「飲系」が五割強にまで落ち、「遊系」のミセが一割近くにまで達している。

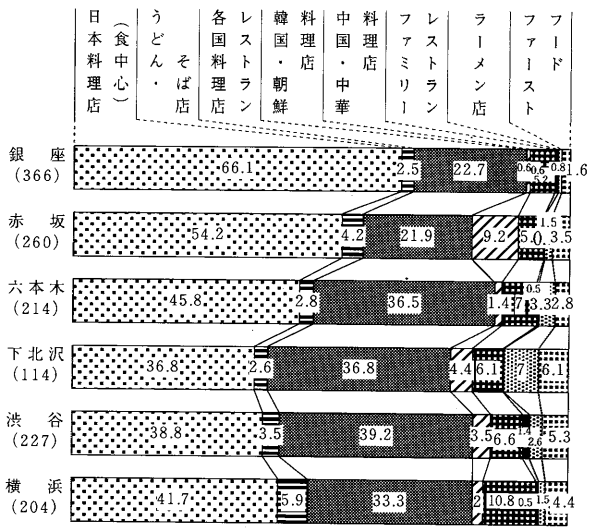
さらにミセの業態別にみてみると（図3）、「食」系では「銀座」「赤坂」「六本木」「渋谷」といった順に、街の利用者の年齢層が低下するにしたがって日本料理店の占める割合が減少し、代わりに各国料理（イタリア、フランス、エスニックなど）が増加している。当然のことながら、渋谷や下北沢ではファーストフード店の比率が高くなっている。同様に、「飲」系についても、「バー・クラブ」といった業態の店は「銀座」「赤坂」に多く、「居酒屋」「パブ・ビストロ」といった業態は「六本木」「下北沢」「渋谷」などの若者が多く利用する街で四割近く占めている。また、こうした街では、喫茶店やコー

図－2　盛り場のミセの構成



（NTT「タウンページ」1992年版より集計・作成）

図－3　「食」系のミセの構成



（NTT「タウンページ」1992年版より集計・作成）

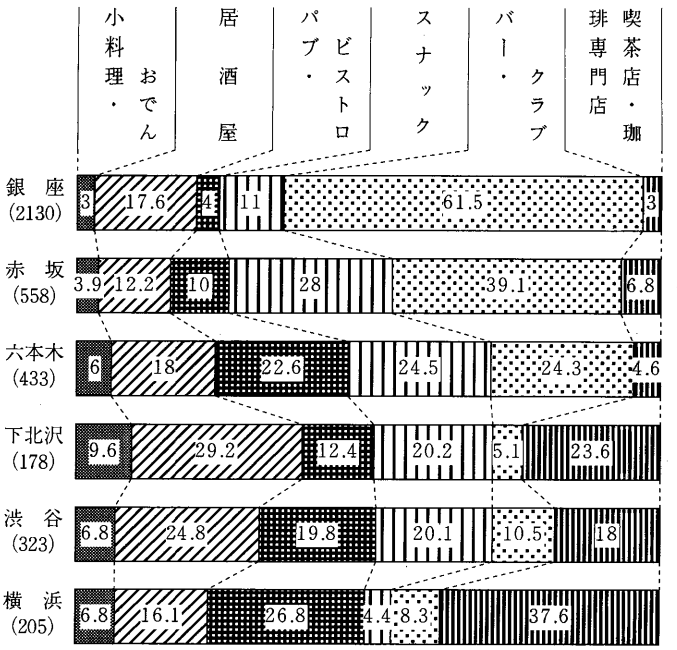
ヒー専門店の比率が、他の盛り場に比べて高くなっていることも特色となっている（図4）。

こうした街の利用者（来街者）の年齢層や特性に関する街の機能、ミセの構成といった傾向は「遊」系でも同様であり、「ゲームセンター」や「マージャンクラブ」でその傾向は顕著である（図5）。

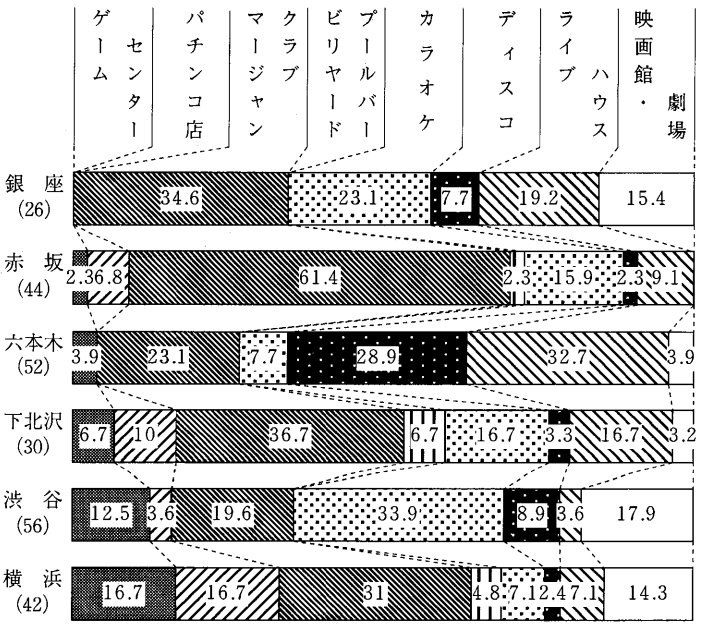
こうした盛り場のミセと街の関係を表したのが図6である。図では、左の方にあるミセの比率が高まるほど、若者を中心に一人やデートなど少人数の遊びに利用される街の性格が強くなり、右の方に行くほど、中高年や社用族が利用する街という性格が強くなることを示している。

このように、盛り場は、都市の遊び人たちの属性や遊びニーズによって、そのミセの構成は確かに異なっており、そうしたミセの構成が、それぞれの盛り場を性格づけている。そして、そうした盛り場がそれぞれ独自の機能や個性を発揮することで、全体として、各世代ごとの都市の「遊び」を支えているのである。

図－4　「飲」系のミセの構成

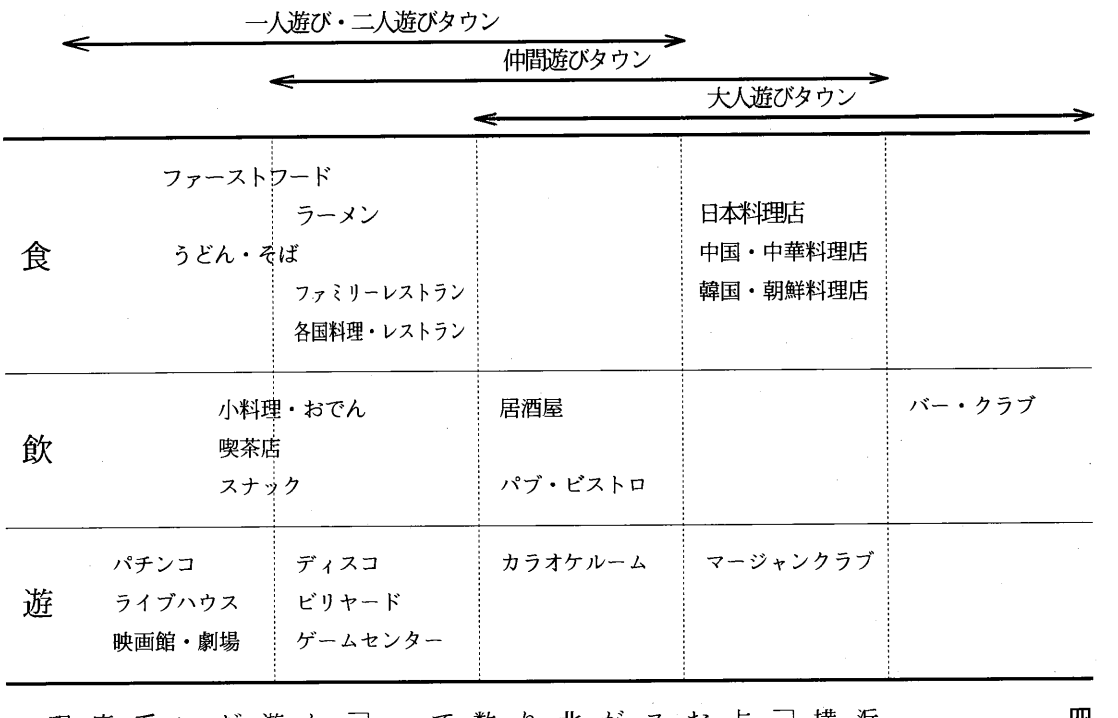


図－5　「遊」系のミセの構成



図－2～5は、各繁華街を代表する地点として、銀座……銀座4～8丁目、赤坂……赤坂3丁目、六本木……六本木3～7丁目、下北沢……北沢2丁目、渋谷……宇田川町、横浜……北幸、南幸を抽出し集計したもの

図－6　遊びのミセ機能と街の性格



四――若者の街だが、性格づけはこれから

―横浜西口

こうした分析をもとに、横浜市内の盛り場の一つである横浜駅西口周辺をみてみると、「遊」系のミセが一割近くを占めている点や、「飲」系において「居酒屋」「パブ・ビストロ」といったミセの比率が高い店で、「渋谷」や「下北沢」に似た構造を示しており、若者を中心として、少人数の遊びの街という性格を持っている。

しかし他の盛り場に比べて、「飲」系のミセ比率が低い点からみて、都市生活者の夜の遊びを支える街としては、まだまだ成熟化の途中にあるといえるだろう。また、「飲」系の中で「喫茶店・珈琲専門店」の比率が高いことからは、現時点では、「遊び」の街というよりも、遊ぶための待ち合わせや、「遊び」に行く前のウォーミングアップなど、ここから別の「遊び」空間に出発するための、「入口の街あるいは空間」といった性格が感じられる。

図7は、平成三年に横浜市が行った来街者の観察調査の結果である。同じ横浜市内の繁華街である上大岡商店街と比べて、横浜西口は深夜まで人通りが絶えず、盛り場としての賑わい感がうかがわれる。利用者も学生やヤングOL、サラリーマンが中心となっている。

今後、横浜西口が、横浜市民の「遊び」を支援する空間として、「昼」の顔を中心とした盛り場になるのか、また、「飲」機能を高めて、「夜」の遊びを担う街へと変化していくのか、――。ミセの構造変化とともに横浜西口への来街者も街空間の性格も大きく変化していくことになる。成長の途上にある都市空間として、横浜西口地域における今後のミセの動向が注目されるところだろう。

〈コミュニケーション科学研究所首席研究員〉

図－7

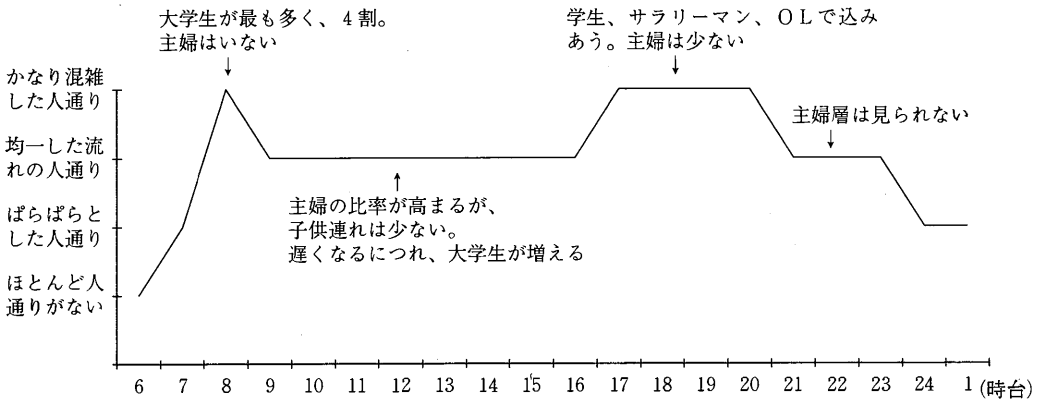
●横浜駅西口（パルナード周辺）

1．観察状況

・6時台～9時台
開店している店はファーストフード店のみ。7時台にはサラリーマン、8時台は学生が多く、朝のピークは8時台。

・10時台～16時台
10時に各店一斉に開店する。それと同時に主婦の比率が高まり、3割前後を占める。通行量はこの間変化はなく均一な状態が続く。また午後に入ると学生の比率が少しずつ高くなる。

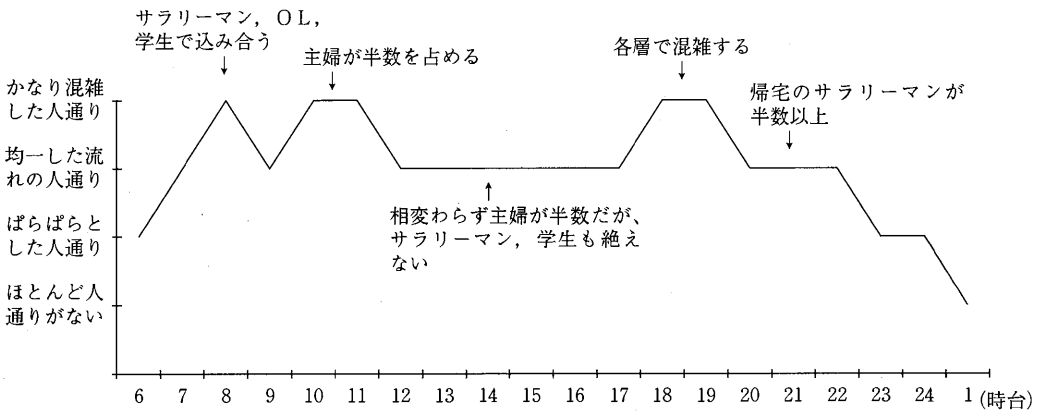
・17時台～1時台
17時台から20時台は夜のピークで各年代層、職業の人が入りみだれ、かなり混雑した状態が続く。21時台以降は主婦の姿が消え、学生、サラリーマン、OLがほぼ同じ割合でいる。この頃閉店する店が増え始め、人通りもやや減ってくるが、絶えることはなく1時台に入ってもぱらぱらとは通行している。



●上大岡商店街

1．観察状況

・6時台～9時台
出勤のサラリーマン、OLが大部分を占める。8時台にはこれに学生が加わり、朝の通行はピークをむかえる。

・10時台～18時台
主婦が全体の半数を占める。10時台、11時台には商店もほとんど開店し、通行量は再びかなりの混雑をみせる。午後に入っても人通りは絶えず、18時になると主婦、サラリーマン、OL、学生が通り、夜のピークとなる。

・19時台～1時台
19時台も変わらず通行量は多いが主婦の割合が減り、かわってこれ以降サラリーマン、OL、が大半を占める。22時に長崎屋レストラン街が閉店する頃まではある程度の人が通っているが、23時台以降は減少し、1時台にはほとんどなくなる。